

IV 博士論文をふりかえって

博士論文を振り返る

名古屋大学大学院環境学研究科専任助教
渡辺 克典

2009年3月、課程博士論文「国民国家形成期における発話障害と発話矯正——明治・大正期の言語と社会をめぐる〈知〉に着目して」にて博士（社会学）の学位を取得しました。博士論文は、書いて、提出して、審査されるものだと考えていましたが、まさか振り返ることまで求められるとは想像していませんでした。「振り返るまでが博士論文」なのでしょうか。

博士論文の作成では、まず、博士論文の「課題」を設定することの困難がありました。博士課程の院生生活の研究成果は、アーヴィング・ゴフマンの相互行為論、セルフヘルプ・グループの調査、吃音者をめぐる歴史社会学（言説分析）、日本の社会学史の検討など、およそ結びつかない課題を思うままに研究させていただきました。指導教員である西原先生に「広すぎる」と諭されていたことが、まるで昨日のように思い出されます。

院生生活がすすみ、次第に諸先輩方の博士論文が提出され、私自身にも博士論文執筆のプレッシャーがかかってきました。博士論文は、「論文」と名のつくものである限り、「ひとつの問いとひとつの答え」を目指すべきものです。私が発表してきた研究成果は、ひとつにまとめるのにはかなりの力技が必要となるものでした。最終的に、散乱してしまった課題の中から、吃音者をめぐる歴史的研究を国民国家論の枠組みにのせて論じることになりました。

しかし、「課題」を設定し、博士論文提出資格を得たあとも、私の関心は広がってしまいました（私の耳は、都合の悪いことについては右から来たものを左へ受け流してしまうようです）。最終的に、提出資格を得た後の「社会的なもの（the social）」への関心は、日本社会学史と結びつけるかたちで博士論文の一部となりました。このせいで博士論文の完成は当初の目標よりもだいぶ遅れてしまうこととなりました。

さて、どこまでも自分勝手に研究をする私の道筋をつけて下さったのは、ほかならぬ西原先生と、社会学講座の先生方でした。主査をつとめていただいた西原先生には、論文のイロハから教えていただきました。どこに到達するともしれない研究に対して、つねに背中を押して（ときに叩いて）いただかなければ博士論文など夢物語におわったことでしょう。副査をつとめていただいた丹辺先生、河村先生には、私の拙い論文を精査していただき、感謝の言葉もありません。また、退官・異動されてしまった先生もふくめ、社会学講座の先生方には有形・無形の叱咤激励をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

また、博士論文まで至ることができたのは、社会学講座という恵まれた環境が欠かせな

かったと思います。とくに私が所属していた西原ゼミは、日本学術振興会特別研究員や博士号取得者といった先輩が並び、「毎週がシンポジウム」の様相を呈していました。全国規模の学会で発表するよりも、西原ゼミで発表するときのほうが緊張しました。このような場で発表・討論させていただいたことで度胸もつき、博士論文提出などという無謀に挑んでいけたのだと思います。さらに、講座の院生主催の勉強会や研究会で学ばせていただいた後輩からの刺激も欠かすことができませんでした。私の博士論文が少しでも「論文」として体裁をもつのであれば、それは名古屋大学社会学講座という恵まれた環境があったからにはほかなりません。

最後に。正直に申し上げて、いまでも博士（社会学）の実感はわかず、博士論文を振り返ることもままなりません。ただひとつだけ言えるのは、博士論文を書き終えた後、社会学を学びはじめた当初よりも社会学の〈面白さ〉を実感しています。博士論文完成までの過程で思い出される数多くのお世話になった皆様には、この〈面白さ〉を実践する研究で恩返しをしていきたいと思っています。

千里の道も一歩から

伍 国春

2004 年春、名古屋大学で再び学生となった。これは長年勤めた北京の大学の教職を辞めた後のことであった。このような選択をしたのは、日々の仕事を繰り返すうちに、自分は何を求めているのかを自問するようになったからである。学生を指導する立場になったが、自分にはまだそれに相応する研究能力がない。博士後期課程で厳しい学術的訓練を受けないとよい研究はできない。あれこれ悩んでいるうちに日本政府国費留学生に採用され、名古屋大学に留学できることになった。厳しい学術的訓練を受けて博士号を取りたいという一心で名古屋に来た。当時、この夢は実現できるかどうかわからなかったが、ひたすら努力すればよいと覚悟した。

いま北京の自宅で、名古屋で過ごした 5 年間で振り返ると、まるで別世界のことのように感じる。それは悩んだり、笑ったり、学問にふけったりする日々であった。名古屋には絶えず議論する場があり、互いの研究を批判しあうことで博士論文を完成することができた。「千里の道も一歩から」と言われるように、博士論文を完成するには少しずつの積み重ねが必要であった。その道は決して平坦ではなかったが、振り返ると 3 つの段階を経てきたように思う。まず一本目の論文、次には学会誌に載せた論文、最後は博士論文である。博士論文のボリュームは学会誌論文の 6~7 本分くらいで骨の折れる仕事だったが、一本目の論文は出発点なので研究生の時に大いに苦労した。

幸い私は一人だけで努力したわけではなかった。ゼミでの発表、名古屋大学社会学会での発表、学会での発表など多くのチャンスがあり、毎回一つでもよいから新しいことを言うように努力した。当時は博士後期課程の院生が多く、博学の先輩たちから多くのアドバイスをいただいた。さらに博士後期課程 2 年の時、社会学講座に博士論文作成指導セミナーという制度ができた。みんなの前で研究構想を話すことで課題が明白になった。先生方や院生仲間と議論した日々を振り返ると、学問と出会う感動がしばしばあった。段階ご